

「売り」探しの旅

Journey to Finding a Selling Point of My Own

貝沼 恵美
KAINUMA Emi

I. はじめに

私が筑波大学地域研究研究科に入学したのは、1997年春のことであった。ただ多くの大学院進学者と異なり、私は大学卒業とほぼ同時期に進学したのではない。大学卒業後に複数の職に就き、その経験から得た疑問や好奇心から大学院進学を志すようになった。

大学生当時はベルリンの壁の崩壊にはじまる民主化への世界的潮流、ソビエト連邦の終焉など、世界の構造が大きく変容した時代でもあった。3年次にアメリカ研究のゼミに所属し、米ソ関係を取り扱うことにした。卒業論文のテーマを「アメリカ人から見たソ連邦の崩壊」とし、対象時期を「ゴルバチョフ書記長就任以降」「8月クーデターから崩壊まで」「崩壊後」の3期に分け、それらを政治家、有識者、マスコミ、市民の各属性の人々がどのように評価をし、それが時期を追っていかように変化したかを声明、論文、報道などの情報に加え、市民については聞き取りおよびアンケート調査の結果も踏まえて分析した。この研究に取り組んでいた時は、世界の中で強い影響力を持つ超大国に関心があった。しかし4年次の就職活動を通じて、国際社会における対立構造のみならず協調体制というものにも目を向けるようになっていった。

II. 大学卒業後から大学院進学まで

1. 大学卒業後の葛藤

大学卒業後は情報関連分野の民間企業に就職し、慣れない仕事にとまどいつつも先輩や同僚に恵まれ、楽しく毎日を過ごしていた。そして1年目が終わるときに上司と翌年度以降の仕事に関して相談する機会が設けられた。当時の私は社内業務が多かったため、社会とより直接的にかかわっていけるような仕事がしたいと希望したところ、「お前の売りは何だ？」と聞かれたものの、即答することができなかった。そんな私に上司は「売りのないお前に仕事を任せるわけにはいかない」と言い、翌年も基本的にほぼ同じ仕事を継続することになった。そのことを通じて、当時の自分は売りがなく、自らがやりたいことへの関わり方も明確に説明できないという現実を思い知ることになった。そしてそのときから、改めて自分が何に拘り、そのためにはどのような強みを持つ必要があるのかを考えていくことになった。そして、自分が大学4年次に関心を持つ

ようになっていた国際協調を通じ、「国際協力」の分野で、知識やスキルを持っている人と開発途上国の人の橋渡しができるような、語学（英語）を使う仕事をしたいと考えていることに気付いた。新卒で入社した会社は2年目の7月で退職し、派遣職員やアルバイトをしながら英語を勉強し、退職から10か月後に開発途上国から来日する研修員をサポートする職を得ることができた。当時の国際協力事業団総裁の国際協力における日本の役割と課題（柳谷1992）からも大いに刺激を受けていた自分にとり、小さくとも国際協力に参加できるようになったことに大きな喜びを感じていた。

2. 「フィリピン」との出会いと初めて見たマニラ

アジアのみならず中南米、アフリカからの研修員の方々と接しながら仕事をする日々は、驚きや気付き、発見の連続であった。時には宗教に基づく考え方の違いや、異なる地域あるいは文化を持つ人々の仲裁に入ることもあった。また自分自身も価値観や生まれ育った環境の異なる人々との接し方について、失敗を繰り返しつつも多くの経験を積むことができた。そのような時間を過ごす過程で、偶然、フィリピン出身の人々とかかわる機会があった。当初は、自身にとって数多いエスニックグループの一つに過ぎなかったが、多くの国の人々と友好的な関係を構築し、朗らかで社交性の高いその人柄に関心を持つようになった。それまでフィリピンと言えば、治安が悪く経済的に厳しい状態の国という、マスコミで報道されるようなステレオタイプのネガティブな情報に支配されていた私には、勝手に描いていたフィリピン人像との乖離に驚かされる日々でもあった。彼らとの交流を通じてフィリピンへの関心は高まり、近所の本屋に行き「フィリピン」がタイトルに含まれる本をすべて買い占めた。そのなかでも三木（1993）を通じて、それまで接してきたフィリピン出身者の言動の背景にあるものや、その国民性を理解することができ、その内容は大変に興味深かった。ほかの書籍も読み進めるうちに、あのような魅力的な国民を作り出したフィリピンという国を是が非でも自分の目で見てみたくなり、すぐにマニラ行きのチケットを手配した。

そして1996年2月に初渡比としてマニラに旅立った。厳寒の成田を旅立ち、しばらくすると機窓の先に真夏の積乱雲が広がる。機内の空気も心なしかぬるく感じられ、成田を出発して4時間ほどすると、一面に広がる山地が見えてきた。さらに進むと、町のような場所に大きな文字が書かれた屋根が多数見えた。飛行機が下降をはじめ、しばらくするとバイ湖が広がり、何かを養殖しているかのような多数の四角形の枠が湖面を覆っているのが見えた。そしてニノイ・アキノ国際空港にアプローチしていくと、中心地の一角に高層ビル街が集積し、その周辺に錆びた色の低層住宅が無数に広がる様子に驚いた（写真1）。常緑の国らしく生えている木々は青々としているが、近代的な高層ビル街と古



写真1 機窓から望むマカティCBD
(1996年2月撮影)

びた屋根の低層住宅街が隣接する様子とコントラストはあまりにも印象が強く、そのときの光景は今でも鮮明に覚えている。都市的景観と農村的景観がつながるのはどこにでもある現象だが、これほどまでに性質が異なる隣り合う地域をみるのは初めてであった。4泊5日の滞在の間に、かつて仕事で知り合った友人の案内でリサール公園やマニラ湾、マカティCBDの商業施設などマニラ首都圏内の主要な観光地や、郊外のタガイタイを訪れた。行先で見るもの触れるものすべてが新鮮だが、同時に懐かしさも感じ、それは極めて心地良い時間でもあった。私のフィリピンへの関心はますます高まり、さらにこの国について知りたいという思いから7か月後に筑波大学の地域研究研究科を受験することになった。

3. 現在に至るテーマとの出会い

ただ、フィリピンから帰国してすぐに大学院進学を決めたのではなく、当初は働きながら自分なりにフィリピンについて独学で学んでいくつもりであった。しかし知れば知るほどフィリピンへの関心は尽きず、いつしか自身のすべての時間をフィリピンを理解するために使いたいと考えられるようになった。また特定の国に強い関心を持ちながら、多様な国からの研修員と接する仕事を続けることにも心苦しさを感じていた。自分でも気付かないうちにバイアスのかかったかかわり方をすることで、フィリピン以外の国の出身者に不快な思いをさせてしまっているかもしれないことを危惧したのである。

それまではマニラを中心にフィリピンをとらえ、マニラから発せられるものから同国を理解していたが、1996年7月に仕事でフィリピンのボホール島出身者の研修通訳をする機会があり、そこで見方が変わるようになった。ボホール島はセブ島の東75キロにある約4,000平方キロメートルの島で、農業を主要産業としており、コメ、ココナッツ、トウモロコシなどを生産していた。ただ経済水準は高くなく、その研修員は同地域で新たな農作物栽培の導入を検討するにあたり、その候補としてのユウガオの生産方法を修得するJICAのプロジェクトに参加するために来日した。干瓢は日本料理でもしばしば用いられるが、生産に手間がかかることから生産者は多くなく、その結果、高額で取引されている。そのため土地と労働力が豊富なボホール島でユウガオを栽培し、現地で干瓢に加工して輸出することができれば、大きな利益に繋がることが見込まれていた。プロジェクトの第一歩としてその研修員は栃木県壬生町のユウガオ栽培から干瓢加工までを行う農家で、1週間程度研修を受けることになった。干瓢生産にあたっては、夜明け前にその日に加工するユウガオ（およそ40～50個）を収穫し、カンナがついた回転器具で紐状にむき、それを竿にかけて日の出とともに天日干しする。14時ぐらいまで屋外で干したのち、室内で燻して劣化を防ぐという工程のため、その研修員は毎日午前3時から農家で研修を受け、その隣で私は生産者の説明をひたすら英訳して彼に伝えた。ユウガオを一定の幅と厚さにむくことは困難で、なぜそのことにこだわらなくてはならないのかと質問されたので生産者の方に尋ねたところ、壬生の干瓢は地元のみならず東京や京都などの料亭でも扱われており、味、質、形状の全てで安定した高い水準が求められるとの回答であった。徹底的に品質にこだわるそのような考え方はフィリピン出身の研修員には新鮮に映ったようで、ノートに書き留めていた。口数が少なく、

自身が知るいつも笑顔の朗らかなフィリピン人とは少々異なるタイプであったが、次第に打ち解けていろいろと話をしてくれるようになった。そのなかで、私は彼の話す英語がマニラ近郊の人が話す英語とはやや異なること、また彼の『「マニラ」に自分たちの気持ちはわからない』という言葉が心に重く響き、その後の自身のフィリピンに対する関心にも大きな影響を与えることとなった。

日々の業務にあたりつつ、フィリピンに関する書籍を読み進めて同国についての知識を獲得すると同時に、フィリピンのような開発途上国が抱える問題や、一日本国民としての自身がどのようにフィリピンとかかわっていくべきなのかについても考えるようになっていった。

そのためにはどのようにすればよいか、かつて近所にお住まいだった綾部裕子先生が筑波大学の国際関係分野で教鞭をとられていたことを思い出し、相談させていただくことにした。そこで、筑波大学の地域研究研究科に、フィリピンに関心があるのであれば「東南アジア研究コース」があること、また当該コースにはその年度末で帰国されるがフィリピン出身で歴史学をご専門とされるレスリー・バウソン先生がいることをうかがった。一方で、ボホール島の研修員との一件でマニラと地方の関係性にも関心を持ち始めていたこともあり、都市と農村の関係や、農村部から都市部への人口移動に着目していることをお伝えしたところ、同コースには開発経済学をご専門の今岡日出紀先生がいらっしゃることもうかがった。そこでまず渡辺（1996）で開発経済学の基礎的概念を理解し、アーサー・ルイスによる二重経済発展モデルやハリス＝トドロモデルをベースとする研究計画書を作成して出願し、大学院入試に臨むことになった。

入試の当日、バウソン先生は面接委員として会場にいらっしや、穏やかな笑顔で何点か英語で質問をしてくださった。私の解答に対してコメントをくださり、不思議ととても心が温かくなる入試であった。しかし、入学できたとしてもその時にはバウソン先生はいらっしやらないことを残念に感じていた。

III. 念願の大学院生活

1. 修士課程 - 資料を読みふけり、はじめての調査を実施 -

そして1997年4月から、地域研究研究科の大学院生になった。出願時の研究計画書に書いたとおり、フィリピンの都市と農村の関係性について研究をしたいと考えており、今岡先生にご指導を仰ぐことになった。毎日、フィリピンのことを考えることができ、同国をより理解するための環境も整い、幸福感に満ちていた。また中央図書館には膨大な資料があり、それまでは「フィリピン」がタイトルに含まれる書籍を書店で探すのにも苦勞していたのが、データベースで検索すると古い資料も含めて、大量に閲覧できるのも嬉しい限りであった。授業がないときは中央図書館に行き、学生用の個室を借りて授業課題に取り組みつつ、蔵書検索をしてフィリピン関連の文献を読みふけるのが日課となっていた。また、1階の旧東京教育大学時代の蔵書が収められたフロアの古い文献特有の匂いも好きで、そこで過ごす時間も少なくなかった。

1年目の夏に具体的な研究テーマを考えるにあたり、中央図書館でリム・野沢（1993）を手

にした。そこでフィリピンでは1991年に地方政府法を大幅に改正したこと、それは途上国における分権化のモデルと称されるほど画期的な内容であったことに興味を持ち、地方分権というテーマからフィリピンの「都市と農村」「首都と地方」の関係性を研究していくことに決めた。最初に訪れた時にマニラでみた地域格差にもかかわれることも、地方分権を選択した理由であった。そのほかには今岡先生の授業でも取り扱われた東南アジア社会における互酬的な「パトロン・クライアント関係」も、特に農村社会を理解する上では有益で興味深く、この視点も修士論文の中で取り入れたいと考えていた。この概念は、今なおフィリピン研究を遂行し、住民の行動規範を理解するうえで大変に役立っている。

修士課程在籍中に3回、フィリピンを訪れた。1回目は1年次の12月に9日間、2回目は1年次の3月から51日間、3回目は2年次の10月から20日間であった。1回目の渡比時にはすでにテーマも決まっていたが、限られた日数の滞在ということで気持ち的にも余裕がなく、もっぱら地方政府法に関する資料、統計データを集めることに終始した。ただそのなかでも貴重な時間であったのが、フィリピン大学に戻られたパウソン先生にお目にかかれたことだった。出発前に今岡先生から、マニラに行くのならパウソン先生にお会いしてきたらどうかと、連絡先を教えてくださいました。入試の時の一受験生の自分のことなど覚えていないだろうし、ご迷惑だろうと思いつつもメールさせていただくと、すぐにお返事をくださり、会う日時を決めてくださった。約束の時日に指定された教室に行くと、授業が終わったばかりの先生がいらして、入試の時と同じ笑顔でそのまま行政学部の建物に連れて行ってくださった。そこでは事前にアポを取っておいてくださった行政学部の先生方に紹介していただいた。そのときに購入した行政学部で出版された書籍には、日本でいくら探しても見つからなかった1991年地方政府法についての詳しい記載および分析があり、現地で文献を探すことの意義を強く認識させられた。その後、2回目、3回目の滞在もパウソン先生には大変お世話になった。2回目の滞在時には、アキノ政権下で1991年地方政府法を起案したアキリノ・ピメンテル上院議員に面会する段取りもつけていただいた。修士論文提出3か月前となる3回目の滞在時にも、貴重なアドバイスを種々いただいた。ただこの時の滞在中は、現地の新聞で公表された情報を、台風襲来で停電するなかバッテリーをフル活動させてひたすらエクセルに入力していた。今となって考えると、なぜあの貴重な滞在時間をデータ入力に充ててしまったのか悔やまれるが、論文提出が迫っており、そうするしかなかった。

2. 「都市—農村」では説明できない地域構造

東南アジア研究コースでは、東南アジア地域を題材とした授業が行われていたが、正直、フィリピン以外の国に関する授業の時には、どこか遠い国の話を聴いているように感じていた。また「都市と農村」「首都と地方」などに関するテーマ以外の文献を読むことにもやや身が入らない出来の悪い学生であった。しかし今となって振り返ると、どうしてあれほどの恵まれた学びの機会を存分に享受しなかったのか、後悔しかない。

そのようななかで、2年次の夏に今岡先生が修士課程修了後のことを尋ねてくださった。フィリピンの研究がますます面白くなり、さらに研究を続けたいと考え始めていたこともあり、進学

希望であることをお伝えした。そこで博士課程では何を研究するかと考え、周囲にも意見を聞いてみたが、多くの答えが「開発途上国における地方分権化」「フィリピンとフィリピン以外の国の地方分権化政策の比較」というように、修士論文で取り扱ったテーマを水平的に拡大させるものであった。その背景には「あなたはもうフィリピンの地方分権についての研究はやったし、都市と農村の関係にも取り組んだのだから、次のテーマに行くべき」という考えがあったようである。

しかし私の中で、このテーマはまだ終わっていなかった。特に2回目の滞在では、ルソン島北端の北イロコス州からセブ島のあるビサヤ地域、カミギン島やミンダナオ島の東ミサミス州まで様々な地方を見る機会に恵まれた。かつて一緒に壬生町に行った研修員にもボホール島で会うことができた。その時に感じたのが、一口に地方と言っても、ルソン島内の地方と、ビサヤ地域やミンダナオ島の地方では特性が異なるのではないかと、同じ「地方」として一括りに捉えるのは不適切ではないか、ということであった。また英語はフィリピンにおける公用語であるが、イントネーションや発音も地方によって異なった。このことはのちに同国の言語事情を理解する過程でその理由を理解していくが、この時点でフィリピンの地域の関係性に対する自身の意識は収束に向かうどころか、むしろ疑問が広がり好奇心は一層深まっていた。またボホール島の研修員が言っていた『「マニラ」に自分たちの気持ちはわからない』という言葉には、マニラのみならずルソン島全体に対する意識も含まれていたことにも気が付いた。さらに、3回目の滞在時に入力したデータから、ルソン島とルソン島以外の地域、人口の多い地方と少ない地方、北部と南部、東部と西部でも種々の差異があることが明らかになった。少なくとも「都市—農村」で説明できるような単純な構造ではなく、このままで終わることに私は納得がいかなかった。

3. 博士課程 —空間的視点を取り入れてのアプローチ—

地域研究研究科は修士課程のため、研究を続けるにはどこかの博士課程に進む必要があった。しかし、修士論文の主査であった今岡先生はその年度末で筑波大学を離れられることが決まっていたので、新たに指導してくださる先生を探す必要があった。

私の授業に対する取り組みが偏向的であったことはすでに述べたが、そのなかで毎週楽しい科目があった。それは研究科全1年生の必修科目であった「地域研究論」で、北アメリカ研究コースの村山祐司先生が担当されていた。その授業でフィリピンが取り上げられることはなかったが、教えていただいた地域の考え方はフィリピンにも当てはめることができ、新たな地域の見方を修得できることが楽しく、毎週のように授業終了後は教卓の先生のところに行き、質問をしていた。当時、村山先生は地球科学研究科（現、生命環境科学研究科）に所属されており、そこがどのような学問を扱う研究科なのかはよくわからなかったが、少なくとも講義内容は極めて魅力的であった。そのような経緯もあり、修士論文の時の副査を決めるときには村山先生のもとにお願いにあがり、お引き受けいただいていた。

進路についてどうすべきか途方に暮れるなか、修士論文のことで村山先生の研究室を訪ねる機会があった。そのときに修了後のことをご質問いただき、進学希望だが、進学する以上はフィリ

ピン以外の地域も研究対象としなくてはならないのだろうけれど自分は引き続きフィリピンに特化したテーマとしたいこと、修士論文では地方分権を扱ったが政策そのものよりは国内に存在する地域格差に関心があることを訥訥とお伝えした。その話を聞いた先生は「あなたのやりたいことは空間的な視点に基づく地理学ならできる」とおっしゃってくださった。地理といえば、どちらかというと「気候や河川の名称を覚える科目」という印象が強かったため、村山先生の言葉が当初はぴんとこなかった。ただまずは先生の勧めもあってブルック（1987）でこの分野のことを学び、意識を改めた。そのうえで地球科学研究科を受験して、村山先生ご指導の下で3年間、学位論文にむけた調査と研究を行っていくことになった。

同研究科に進学はしたものの、そもそも自身のルーツが地理学ではなかったため、空間的な視点を取り入れることがなかなか体現できず、ここでも研究科の先生方をはじめ、諸先輩方に多くの教を乞うことになる。そこで徹底的に叩き込まれたのが、「地域をつくる要素は多岐にわたる」ことと、「地域を理解するためには視野を広げなくてはならない」ことであった。当初、私はフィリピンの地域格差は中央集権や地方分権の帰結と考えていたが、地域の実態を政策面から考えはじめるところに一齐に指摘が入った。またそれまであまり考えることがなかった自然環境も、地理学には不可欠な要素であることも理解した。空間的視点に立脚してフィリピンをみると、それまで気付かなかった、あるいは見えなかった地域の実態が浮き彫りになってきた。データからみえる地域的差異も、地形図などを組み合わせることで現地に行く前の時点である程度はその形成要因を推測できるようになった。地理学に出会えたことで私はフィリピンを一層理解するための新たな視座を得たのである。

IV. 研究を進めるうえでの課題

私自身が博士課程在籍時に直面した課題は大きく2つある。第1は自身の個人的な事情により長期滞在型の調査ができないということ、第2に統計データの信頼性にかかわることであった。

空間的視点を取り入れた研究を行う場合には、地域を知ることが特に重要である。まず地域を訪れ、地域の全体像を把握したうえで各々のテーマに入っていく。現地の地形や気候、住民の生活を知らずして地域は語れない。価値観や生活スタイルが異なる海外の研究であればなおさらである。本来ならば参与観察型の調査が望ましいのだが、私にはそれができなかった。また短期間の滞在で結果を出さなくてはならないため、失敗は許されない。博士課程における全4回の調査のうちの1回目は準備が悪く、あらゆる失敗をした。まず実施時期が悪く、12月9日から23日まで滞在するスケジュールを組んでいた。しかし、キリスト教徒が多いフィリピンでは、12月に入ると役所職員も含め多くの人がクリスマスに家族で祝うため故郷に帰省してしまう。統計データや地方財政に関するデータを入手したかったのだが、担当者不在で入手できなかったり、入手できたとしても多くの時間を要し、短い滞在期間での大きなタイムロスにつながった。またこの時期は海外就労者（Overseas Filipino Workers）もクリスマスで大勢帰国するため物価の上昇が著しく治安が悪化し、また交通渋滞があらゆる場所で一層激化し移動にも苦労した。

ある日、私は交通渋滞に巻き込まれ、先方との約束時間にたどり着けそうになく焦っていた。なんとか間に合ったものの、訪問後も最初の焦りのあとの強い安堵感、そして炎天下を歩いているうちに冷静な判断力を失い、どう考えても調理不十分な鶏肉を口にしてしまい、ひどい体調不良に陥った。乾季で気温は35度近くになっていたと思うが寒気が止まらず、1メートルが20メートルに感じられるほど道程は長かった。かろうじて宿舎に帰着したものの、今度は1メートルが40メートルに感じられるほど身体が鉛のように重く感じられた。当初の予定ではその翌日に帰国することになっていたが、繰り返す嘔吐もあってマニラの空港まで行くことはおろか、宿舎の部屋から出ることも不可能であった。結局、クリスマスは屋外の激しい爆竹の音もあって眠れず、ぐったりとベッドに横たわったまま繰り返し放映される現職大統領の弾劾裁判関連の番組をぼんやりと視聴し、29日まで滞在延長した。あれほどまでに体調を崩したことは後にも先にもないが、後日、マニラ在住の友人にその話をしたところ、症状からみて40度近い熱があったのではないかと言われた。ただこの経験で相当な免疫力がついたのか、あれ以降、フィリピンで多少怪しいものを食べたり、やむをえずスラムの水道水を口にしてしまっても、体調を崩すことはなくなった。強いというならば、それが奏功しているのかは定かではないが、私は渡比時には必ずチューブのわさびを持っていき、ちょっと疲れたと感じたときには食事に少量添えることにしている。また健常時にはあまり感じないが、体調不良になると、突然和食が恋しくなることがある。そのため、開缶しないで済むことを願いつつ、渡比時には鯖の味噌煮を持っていくことにしている。

第2の課題である統計データについて、今でこそ整備されたデータの多くが無償で提供されるようになったが、当時はデータは購入するものであり、さらに国内の物価を考慮すると高額で、毎回フィリピンの平均世帯年収以上の現金を持ってスラム地区の近くを通過して統計局に通わざるをえなかった。また古いものになると倉庫の奥から引っ張り出してきてもらった統計書をかろうじて購入できても欠損箇所が多く、すべての値を足しても最後に入っている合計値と合致しないことが多々あり、どこまで信頼してよいのか悩んだ。長期滞在ができない私にとって統計分析は研究を進めるうえで不可欠なものであったが、その信頼性が揺らぐというのは致命的な問題であった。また国内地域の分離統合が活発なため、時系列で比較するにはマイクロレベルでデータを解読し、自身の求める地域単位に再構築する必要があったが、マイクロな地域単位でのデータは人口センサスなど一部のテーマに限られていたため、推計値を用いざるを得ないことも悩ましかった。

以上の経験から、特に短期滞Inの場合、その時間をフルに活用するためには緻密な事前準備が不可欠であると考えている。そのなかには渡航先の気候や祝祭日、イベント時期の確認なども含まれる。加えて現地協力者と綿密な打ち合わせをし、調査当日のルートのシミュレーションを行い、第2、第3の案も作っておくことで、不測の事態にも対応できると思われる。また国内で発行された統計は複数国間の比較より国内の時系列変化および地域間比較に用いるのが妥当であると考えている。さらに統計データに高度に依存した研究は極めて困難であるので、個人やキーパーソンへの聞き取り調査などの質的調査と組み合わせることが有効であり、そのためにも信頼できる

インフォーマントや協力者を獲得することが重要であろう。

V. 今日までの日々を振り返り

1. 人に支えられた自身の研究と現在

魅力的なフィリピンの人々との出会いが、今に至る研究生生活の原点である。彼ら彼女たちから辛くても笑顔でいること、人とかかわりを大切にすること、客人をもてなすこと、環境に順応すること、今日を楽しく生きること、他者の過ちを赦すことなど、教えてもらったことは数知れない。

研究面では、フィリピン研究者を標榜していながら知らないことが多い私に対し、友人のみならず聞き取り先の相手までもが、土地の人しか知らないこと、地元の慣習、さらにはコミュニケーションにお

ける言外の意味についてまで教えてくれるのは大変有難かった(写真2)。また調査方法も満足に知らず、とりあえずフィリピンに行った修士課程の時期には、うまく考えを伝えられず漠然かつ曖昧な私の表現から意図を汲み取り、的確なアドバイスをしてもらった。そして現在でも私の代えがたいアドバイザーとなってくださっているパウソン先生には、経済的に厳しかった大学院生時代、調査で訪問した際にはマニラのご自宅に食事付きで宿泊させていただいたほか、パラワン島やミンダナオ島での調査に同行し、見聞を広める機会をいただいた。

修士論文を提出した時に、ある先生に「あなたは素材はいいものを持っているのに、料理の方法を知らない人だ」と言われたことがある。多くの方々に分不相応な貴重なデータを提供していただき、本当にありがたかったと同時に、私がそれを活用しきれず分析と解釈が甘かったということで、自分の未熟さを悔い、提供してくれた方々に申し訳なく思うばかりであった。

また修士課程修了後の進路で路頭に迷った時に手を差し伸べてくださり、学位取得に向けていつも温かくご指導くださった村山先生、学位取得後の就職に苦勞していた時期に励ましと、貝沼・小田・森島(2009)などフィリピン関連の文章をまとめる機会を常に与えてくださった小田宏信先生、フィリピンをテーマとする授業で自身にとり最初となる非常勤講師のチャンスをくださった堤純先生(当時、愛媛大学所属)には感謝の言葉しかない。一人でも欠けていたら今の私は存在しておらず、本当に自分は人に恵まれていると思う。

2. フィリピン研究で失ったもの、地域研究を行う者としてのありかた

フィリピンに強い魅力を感じ、その国が好きだからもっと知りたいという思いで修士課程に進み、フィリピンについて学び、研究していくことになった。その気持ちは今でも少しも変わることなく、よいところもそうでないところも含めて、相変わらずフィリピンに魅了されている。し



写真2 イフガオ族の呪術師(ムンバキ)への聞き取り調査(2003年8月撮影)

かしながら、修士課程に進学した時から、私に対する態度が変わったフィリピンの友人が少なからずいたのも事実である。当時はその理由がわからずにいたが、私がフィリピンに関心を持ち始めた当初から今でも親しくしている友人の言葉にそのヒントがあったように思う。その友人は修士課程でフィリピン漬けとなり喜ぶ私に、冗談めかして「あなたはこれからは友人ではなく、研究対象としてこの国や私たちとかかわっていくんだね」と言った。きっとこの言葉が、研究対象となった地域の人々の気持ちを端的に表しているのだろう。実際、修士課程進学前は友人だったが離れていった人もいた。研究対象としてフィリピンに接していくことになる私を不快に思う人もいたのだろう。

このような経験からも、私は地域研究を行ううえで、相手に対し自身の研究目的を明示すると同時に、なぜその国（地域）でなくてはならないのかという必然性は明確に伝える必要があると感じている。とくに対象地域にとって自身が余所者である場合にはなおさらである。調査される側は、調査する側が考える以上に、なぜ自分たちが調査されるのか、それをもとに何をするのかということに敏感である。それは地域研究のルーツが西欧諸国による覇権拡大のための地域調査であったことにも影響しているであろうし、植民地化された歴史を有する国であれば他者が自国を知りたいと思うことに警戒心や拒否反応を示すのも無理のないことである。現地の人に不要な疑念を持たせないためにも、研究の意義は言わずもがな、自身の地域への率直な思いを伝えることも必要と考える。

また、現地の人々の心情を傷つけるような調査や、土地の文化や価値観の否定、特に研究対象地域が途上国であれば先進国の理論を押し付けるような言動は決してあってはならない。余所者として、常にその土地とそこに居住する人の価値規範を尊重し、彼らに教を乞うという姿勢と感謝、そして調査や研究の結果として明らかになり、彼らの生活に資するものは還元していくことを忘れてはならないだろう。

私自身、地域調査、地域研究に関する授業の中で、現地の方と接する際に留意すべき点として、「人名や地名を間違えない」ことを学生に伝えている。調査協力を仰いでおきながら関連する人の氏名や地域の名称を誤ることや明らかに異なる発音をすることは極めて礼を失している。また、小字も含め聞き取り調査のなかで出てくる地名がわからなければ、空間的視座において極めて重要な情報を逃がすことにもなる。周辺地域も含めた生活圏に関連する地域については、その名称とともに位置関係、当該地域からの主要なアクセス方法、時間距離についても把握しうえて調査に臨む必要がある。

最後に、相手国と日本の歴史的な関係についても理解しておかなくてはならない。自身のフィールドの一つであるルソン島北部山岳地帯のイフガオ州にあるキアンガン町は、第二次世界大戦時に第14方面軍司令官であった山下奉文大将が降伏した地であり、現在でも「山下の財宝」に関する逸話が日常的に語られる。そのため、彼らとの会話でも、戦時中のことや日本軍による侵略について触れられることが少なくない。若い世代は幼少期より祖父母に戦時中の話を聞いて育ってきており、なかには日本軍に身内の命を奪われた者もいる。第二次世界大戦のことは彼らの中で今なお身近で現実的な自らの問題として捉えられており、彼らの人格形成にも多大な影響を及

ばしてきたことは想像に難くない。多くの痛みを負いつつも、それを赦し、そのうえで貴重な情報を提供し協力してくれているのであり、その姿勢には深い感謝しかない。過去の過ちを繰り返さないためにも両国間の歴史を正しく理解しておくことは地域研究を行ううえで不可欠なものであり、そのことをなくして両国の将来につながる友好的な関係は構築できないと考える。

VI. おわりに

フィリピンとの関わりを持つようになった大きなきっかけは「お前の売りは何だ？」という上司の質問にあったわけであるが、私は果たして売りを見つけることができたのであろうか。残念ながら答えはノーである。未だに売りは見つかっておらず、この旅はまだしばらく続くことになりそうだ。

ただ、旅の途中でフィリピンという自身にとってかけがえのない存在を見つけたことは確かである。この国との邂逅により多くのことを学び、様々な人と出会い、自らの見識と価値観を広げることができた。そして以前の自分よりは少しは人間として成長できたのではないかと勝手に思っている。この国に出会っていなかったら私の人生はもっと退屈なものになっていたかもしれない、これからはこれほどまでに笑いあり涙ありで自らの人生を豊かなものにしてくれたフィリピンへ、少しずつでも恩返しをしていく時間としたい。

先に自分のことを「フィリピン研究者」のように記述したが、正直に言うと「フィリピンに強く魅せられた人」というほうが自身の帰属意識としてはしっくりくる。職業上、この国について研究していかななくてはならないが、仮にフィリピンに寄り添う心を失い、「研究対象」としてしか見られなくなることがあれば、その時はこの国と関わることをやめるべきだとも考えている。初心を忘れず愚直なまでにフィリピンとともに生き、その国の繁栄とそこに暮らす人々の幸福を願い、災害や事件、事故で彼らが負う傷に自らの心も痛む、そんな自分であり続けたい。もしかしたら私は生涯、売りを見つけることはできないかもしれないが、売りがなくて苦悩した日々や、今なお不器用に旅路を歩み続けるプロセスが、若い研究者、研究者の道に足を踏み入れようか迷っている方の何かの参考になることがあれば望外の喜びである。

謝辞

23年前に勢いだけで飛び込んだ私を寛大に受け入れ丁寧にご指導くださり、自身の稚拙な修士論文のほぼ全ページが真っ赤になるまで添削してくださった今岡日出紀先生、修論の副査をお引き受けいただいたときから今に至るまで温かいご指導をいただいている村山祐司先生、自らにとり貴重な時間と機会を与え、励ましのお言葉をかけ支えてくださった地域研究研究科の教職員の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 貝沼恵美・小田宏信・森島済 2009『変動するフィリピン—経済開発と国土空間形成』二宮書店。
- ブルック、J.O.・ウェッブ、J.W. 1987『人文地理学』山本正三・石井英也訳、二宮書店。
- 三木陸彦 1993『フィリピン—知られざるフィリピンの素顔』泰流社。
- 柳谷謙介 1992『こころの地球儀—途上国に期待される日本』サイマル出版会。
- リム、J.Y.・野沢勝美 1993『フィリピンの経済開発と地方分権化政策』アジア経済研究所。
- 渡辺利夫 1996『開発経済学—経済学と現代アジア 第2版』日本評論社。
- Harris, J.R. and Todaro, M. 1970 “Migration, Unemployment and Development: A Two-Sector Analysis” *American Economic Review*, Vol. 60, pp.126-42.